

フルート 前田綾子さんの アンブシュア

まずは理想の音を見つけて そこから口の形について 研究してみよう

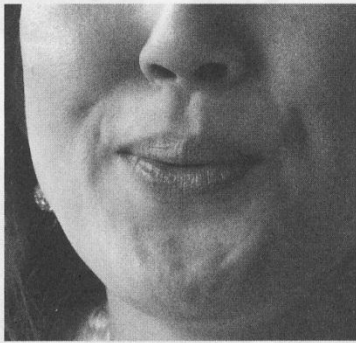
Flute



東京俊成ウインドオーケストラで活躍する前田綾子さん。昔はとにかく、いろいろなフルート奏者のコンサートを聴きに行き、最前列でその吹き方を熱心に観察されたそうです。とても実践的なお話がうかがえました。

●アンブシュアの作り方

私の場合、まずアンブシュアの支えとして、**口の両端を動かさないように**しています。「写真1」。トランペットなどでは「アゴのところを三角にする」っていいですよ。まさに、それと同じなのです。ただ変に意識しすぎると、全体に力が入ってしまい、柔軟性に欠けてしまうので注意してください。口の左右が



【写真1】 頭部管を当てないでアンブシュアを作っていました

うまく支えられているときは、三角になっているのです。下唇が動かないように、アゴを全体で支えるようなイメージが必要だと思います。フルートは、管の中に息が全部入るわけはありません。リードや、金管楽器の唇のよ

うなものはないので、そうすると、口の中で息を「せき止めて」いるような感覚が大切になってきます。まっすぐ、遠くに吹くのだけれど、せき止めるように。せき止めて口の中に圧力をつくる感じです。

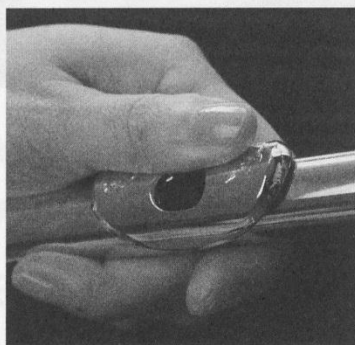
それから、実際にアンブシュアを作ってみると、唇の厚い人と薄い人では悩みが違ってきます。薄い人は比較的、「ボン」と音が出やすいのですが、厚い人は肉厚がある分、ポジションが確定しづらい、見つけにくい、という人が多い印象です。そんなときに目安として考えてほしいのは、唇の外側の乾いたところではなく、**できるだけ内側の湿っている部分が空気の通り道になっているとよい**、ということ。

●頭部管に口を当てる角度

歌口の、息の当たるエッジに向かって吹けば音は出るので、この穴に唇をほんの少しかぶせるような意識で口に当ててください。親指を下唇としましょう。「写真2」の状態だと全部穴が見えていますね。このように下唇をセットすると、確かに吹きやすいし大きな音は出ます。でもこれだと、音の芯(音の密度の濃い部分)がなく、ツヤのない聞ききった音になってしまいます。他の楽器と合奏したときに、ほとんど音が通らず、聞こえ



【写真2】 下唇を穴にかぶせない形。これだと問題が起こる



【写真3】 下唇を穴に少しだけかぶせた形がオススメ。かぶせすぎには注意!!

るのは息の音ばかり……ということになってしまいます。この吹き方だと、ピッチも高くなり、頭部管をすく抜いて吹いている生徒さんをよく見かけますが、これではスケールを吹いてもすく不安定だし、1つの音をppで支えるなんて絶対に不可能です。大き



【写真4】 下唇を少しだけ穴にかぶせて演奏する前田さん

な音だけは出ますけどね……。こんな症状に身の覚えがある人は、「写真3」のように、すこし穴に下唇をかぶせて吹いてみましょう。これによって、チューニングのときに管を入れたり抜いたりする度合いも変わってくるはずですよ。それと音の輪郭も出てくるでしょう。この少しだけ下唇を穴にかぶせる感覚がポイントです「写真4」。

●息を吹き込むときのイメージ

ただし、かぶせすぎると詰まった音になってしまいますので、自分の耳でよく聴きながらコントロールしましょう。フルートは、フレーズの終わりやディミヌ

特集★アンブシュア大研究!!

～プロ奏者に訊く理想のフォーム

エンドなどで、同じ方向に息を吹きこむと音色が暗くなる傾向があります。でも吹奏楽のようなアンサンブルの中ではとくに、他の楽器のピッチが少し高めになる傾向がありますよね。これに歩み寄るためにも、明るめの響きで吹き終わるような習慣をつけておいたほうがよいと思います。私もほとんど吹きあげていくイメージで、顔は絶対に下げないようにしています。「まっすぐ、まっすぐ」と思いついながら、最後に向かってだんだん顔をあげていきます。

●楽器の支え方 ～楽器を自分に引き寄せる

身体大きい男性だと、普通に楽器を構えたら、左手でちゃんと楽器を口に押し当てられますね。でも私は身体が小さいので、そういうわけにはいきません。よく「わきを締め」という説明を聞きますが、それは身体のしっかりした人でないと無理だと思います。実は、左手で楽器を口に固定させるのはけっこう力が要ることで、私の場合はボールを抱えるように、ちよつとひじを張るようにして楽器がずれないようにしています「写真5」。そうしないと一曲を吹き切るまえにバテてしまうので。この左手で楽器を支える力が弱まると、自分が楽器に近づいていくような感じ



【写真5】 前田さんの楽器の構え方



【写真6】 このように楽器を抱え込むような構え方はオススメできない

になってしまい、どんどん調子が狂って疲れてしまいます。常に楽器を自分に引き寄せるようにしてください。

他に、身体のしっかりした男性にありがちな楽器を抱え込むような構え方「写真6」。こういう風に構えると、どうしても息を下方に当てるような吹き方になります。これだとppや、他の楽器の人と音程感を合わせていく作業が、ポリウム、アンサンブルのバランスとしては難しくなってしまうので注意しましょう。

●ピッコロやアルトフルートの持ち替え

ピッコロを吹いた後にフルートに持ち替えると、慣れていないと音が当たりにくくなったりしますよね。これは、アンブシュアでも「口の中の圧力」に違いが生じるために起こる現象です。フルート族は、音の出る仕組みは一緒ですが、口の中にかかる圧力が違うので、持ち替えると「スカーフ」とした音が出てしまったり……。そんなときは、前の楽器の音庄の作り方を引きずらないように、**持ち替えたときに圧力をリセットする訓練が必要**になります。身体の慣れの問題ですので、この楽器はこの圧力、この楽器の圧力はこう、2つは違う楽器、というように切り替える気持ちで、「持ち替えの練習」をしてみてください。

●デクレッシェンドのときに音程が下がる?

他の楽器は、デクレッシェンドしたときには、音程があがってしまうことが多いですね。これは音を小さくしていく過程でアンブシュアを締めてしまっているのが原因だと思います。逆にフルートは締める感覚が少ない楽器なので、**デクレッシェンドするときにはアンブシュアの息の通る穴(パチュー)を、少しずつ小さくしていかないと音程が保てません**。デクレッシェンドやフレーズの終わりに、口の穴の形や大きさを変えないと、息のスピードが落ちてしまうのです。

●よいアンブシュアの見つけ方

私はフルートを始めてからも、アンブシュアについてとくにレッスンを受けたことはありませんでした。ただ数多くの演奏家のコンサートに行くと、実際の音を体感すると、この人はどういうふうにあの音を作っているんだろう、と。アンブシュアやその作り、高音や低音だったり、どんなふうに変えているのかを最前列に座って観察して、見よう見まねで研究していました。大切なのは「音」を感じることだと思います。アンブシュアを直せば音がよくなる、という発想ではなく、**よい音を探して、その音を出すためのアンブシュアを作っていくか**、と聞いて、です。

●トランペットのアンブシュアとの意外な共通点?

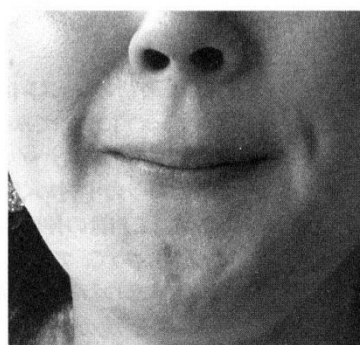
アンブシュアの作り方とか圧力の感覚とか、そういう感覚が、実はトランペットと似ている気がします。フルートって「はぁー」と吹いているようですけど、ものすごい圧力を口の中でかけているので、息が楽器に入る直前のところまでの状態が、トランペット

とほとんど一緒の気がします。例えばトランペットにはアンブシュアを鍛えるためのグッズがありますよね、あれには相当ヒントがあると思います。そのグッズを使うと、口の両端とアゴで支えてアンブシュアを作るという仕組みを、知らない間にマスターできるようなものではないでしょうか。

フルートで全然音が出ない子に「トランペットのバズイングって知ってる? 友達はやっているの、みたことあるでしょう? ちよつと、やってごらん」といって、バズイングを少しやってみたら、それからフルートを吹いてみると、「パチ」とツヤのある音が出たりします。圧力の作り方とか、唇の必要な支えが似ているんだと思います。

●息のイメージ

どんなによいアンブシュアを作っても、身体に力が入っていると音が硬くなり、響きもなくなってしまう。逆に、どんなに身体の使い方がよくても、息の出口を締めすぎたり、唇を巻きこみすぎるとはいけません「写真7」。あたたかい息を出そうというイメージが大切です。そうすれば口の中や喉も広がり、その状態で、息のスピードは唇とおなかで作る。**湿度の高い、暖かい息を出そう**と思うとよい音がしますね。ちよつと寒いときに手を温めようと、息を「はぁー」と吹きかけると、口や喉にイメージできればよいと思います。試してみてください。



【写真7】 これだと唇を巻きこみすぎ